様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年５月１日現在

機関番号：14301
研究種目：基盤（B）
研究期間：2008 年度～2010 年度
課題番号：20320078
研究課題名（和文）ICT を利用した応用言語学的研究
（旧課題名　ICT 支援による応用言語学的研究の展開）
研究課題名（英文）An Applied Linguistic Study Using ICT
(Development of the ICT-assisted Study for Applied Linguistics)
研究代表者
壇辻 正剛（DANTSUJI MASATAKE）
京都大学・学術情報メディアセンター・教授
研究者番号：10188469

研究分野：応用言語学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：e-ラーニング、コンピュータ支援学習（CALL）

１．研究計画の概要

本研究は、日本人学習者の外国語のコミュニケーション能力向上を目指して、ＩＣＴ（情報通信技術）、特に先端的な音声・言語情報処理技術を利用した次世代知的ＣＡＬＬ（コンピュータ支援型語学教育）やe-ラーニングを含む応用言語学的研究を展開し、国際化時代に有効な会話主体の外国語教育支援システムを開発することを目的としている。近年の社会の国際化や高度情報化に伴って益々高まる傾向にある、外国語会話に対する社会の関心に対応し、かつ、大学を含む高等教育機関における人件費抑制の傾向や、外国語教育課目に必要な教員増が俄かには望めない現状、非常勤講師の削減が進む現状への対応をはかる事も目指している。初級や初中級レベルで、会話教育指導がインタラクティブに可能で、ある程度自動化を図ることができるコンピュータ支援型教育(ＣＡＬＬ)やe-ラーニングを導入して、各学生のニーズや自律学習（自学自習）への意欲に応じた指導を行うことを目的としている。

２．研究の進捗状況

本研究では、日本人学習者の外国語のコミュニケーション能力向上を目指して、ＩＣＴ（情報通信技術）、特に先端的な音声・言語情報処理技術を利用した次世代知的ＣＡＬＬ（コンピュータ支援型語学教育）やe-ラーニングを含む応用言語学的研究を展開した。国際化時代に有効な会話主体の外国語教育支援システムを開発することを目的として、研究を推進した。マルチメディアを活用した応用言語学的コンテンツの開発に関しては、中国語及び英語、ドイツ語、タイ語、留学生日本語教育に重点を置いて開発を進め、良質で多様な言語文化、異文化理解、異言語体験が可能なマルチメディア・コンテンツの開発を行なった。構築したマルチメディア・コンテンツに基づいて、オリジナルな ICT 支援型の教材の開発を推進した。学習者がコンピュータを介してインタラクティブに外国語運用能力を高めていくオリジナルな教材の開発を行なった。日本の地理や気候、文化や伝統、風習などをテーマにした教材の開発を進め、マルチメディアの特性を活かして、豊富な画像・映像や、臨場感に溢れ、学習者の興味を引き付ける場面設定を考慮して学習者の動機づけを高める側面にも留意した ICT 支援型の外国語教育教材や留学生用日本語教育教材の開発を行なった。また、先進的 ICT を応用して、発話映像とスクリプトの自動同期を利用した外国語教育支援を提案した。これらの研究成果の社会的還元を目指して、研究成果を大学教育の枠内に閉じ込めず、広く社会への還元へと繋げることを試みた。高大連携を通じて地域の高等学校に研究成果の一部を提供すると共に、さらに発展させて地域連携へと進め、京都府教育センターや国立民族学博物館等に研究の過程で得られた成果の一部を提供した。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）当初研究計画では、日本人学習者の外国語コミュニケーション能力の向上を目指して、ＩＣＴを利用した応用言語学的研究を展開し、国際化時代に有効な会話主体の外国語教育支援システムを開発し、教育の現場に提供・導入して、教育界や社会に貢献することを目的としていたが、3 年間の研究成果によって得られた ICT 支援型外国語教材や

CALL システムは、マルチメディアの特性を活かした斬新な試みを含んでおり、申請者の本務校の初修外国語の現場だけではなく、希望する他の教育・研究機関や、高大連携や地域連携を通じて、地域の高等学校や教育委員会・総合教育センター等にも無償提供され、教育の現場で試用され、新聞で報道されるなどの反響を呼び、実際の教育の現場での声をフィードバックし、今後の改善につなげるネットワークを形成するなどの成果をあげることができたので、おおむね順調に進展していると判断した。

４．今後の研究の推進方策

研究計画は順調に進捗していたが、実際に教育の現場での試行から本格的に利用する段階になって、ＩＣＴ支援の外国語教育を巡る大学等の教育機関の状況が申請時と大きく変わってきたので、研究計画を再構築して最終年度前年度応募に申請することにした。これまでの研究と比較して今後留意しなければならない研究推進方策の主要点は以下のようなものである。

(1)本研究の開始時には、初修（初習）外国語においてはe-ラーニングや自律学習型 CALL は単位取得には関与せず、いわゆる自学自習を対象とした外国語教育で利用する予定であったが、その後、本務校を始め多くの大学で単位を付与する方向に舵が切られた。そのため、研究成果のマルチメディア外国語教材の重要性が大きく増し、単位付与に耐え得る本格的教材として ICT 支援教材開発を位置付ける方向で研究を推進すること。

(2)外国語教育の e-ラーニングでは、当初、Windows-XP 上での Web-CT ベース中心で開発を進めてきたが、その後、多くの教育機関から Windows-Vista や Windows-7、また、Moodle や SAKAI など他の CMS(LMS)(コース（学習）管理システム）への対応や相互間での教材の有効利用への対応を求められるようになった点も反映する方向で研究を推進すること。

(3)日本を巡る国際情勢の変化に伴い、単なる会話主体の教材から、我が国の状況を外国語で発信し、また、諸外国の異文化理解をより深化する教材が求められるようになったことを反映する方向で研究を推進することなどである。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

1. 加藤靖代・平岡斉士・坪田康・壇辻正剛「破裂子音の先行音節及び後続母音の差異が有声・無声破裂音の産出に与える影響－中国語北方方言が母語である日本語学習者のレベル別比較－『ことばの科学研究』査読有,(印刷中)
2. 坪田康・壇辻正剛「外国語スピーキング演習におけるオーディエンスの影響」『信学技報』TL2010-42, 2010, pp. 35-40
3. 壇辻正剛「ICT 支援の音声分析」『ことばの科学研究』依頼記事、第 10 巻, 2009 年, pp. 22-29
4. 河崎靖「南アフリカの言語事情」『ドイツ文学研究』査読無, 第 54 巻, 2009 年, pp. 54-76

〔学会発表〕（計 16 件）

1. 坪田康・壇辻正剛「自律的英語共同学習における聞き手の意義」日本英語教育学会 2011 年 3 月 30 日,東京都新宿区・早稲田大学
2. 壇辻正剛「共通教育における ICT 支援の外国語教育と発音指導」電子情報通信学会音声研究会電子情報通信学会　音声研究会 2011 年 3 月 4 日,東京都文京区・東京大学
3. Yasushi Tsubota, Georgios Georgiou, Masatake Dantsuji “The effect of an audience in regular and distant class speaking activities in foreign language education,” Authenticating Language Learning: Web Collaboration Meets Pedagogic Corpora, 2011年2月17日, Tübingen,Germany, University of Tübingen
4. 董玉婷・坪田 康・壇辻 正剛「中国語発音学習における自己内省のICT活用の 検討―単独・ペア・グループ活動の比較―」日本教育工学会,2010年9月18日, 愛知県名古屋市・金城学院大学
5. Yasushi Tsubota and Masatake Dantsuji,” A hybrid course for introductory Chinese lectures at Kyoto University,” Technology for Second Language Learning, 2010年9月11日, Iowa State,USA, Iowa State University

〔図書〕（計３件）

１．道坂昭廣，壇辻正剛他、大地社『中国語の世界―北京・２０１１―』2011 年,100 頁
２．木村博保・壇辻正剛、北斗プリント社『マルチメディア英語 CALL 教材 GLOCAL STUDIES『文化探究』準拠版テキスト,2009 年,40 頁
３．河崎靖、現代書館『ドイツ方言学－ことばの日常に迫る－』2008 年,213 頁

〔その他〕

１．高大連携提供マルチメディア英語 CALL 教材 GLOCAL STUDIES, CD-ROM 版
２．国立民族学博物館・言語展示部門・言語展示用プログラム
３．留学生用日本語教育用 CALL 教材『日本の風土と文化』試行版